

機関番号：32617

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19730369

研究課題名（和文）認知症介護家族への支援におけるナラティブ・アプローチに関する研究

研究課題名（英文）A Study of Narrative Approach of Support for Alzheimer's and Dementia Caregivers

研究代表者

荒井 浩道（HIROMICHI ARAI）

駒澤大学・文学部・准教授

研究者番号：60350435

研究成果の概要（和文）：

本研究の成果は、認知症高齢者をかかえた家族を支援するソーシャルワークの技法として、ナラティブ・アプローチの有効性を検証したことである。

本研究ではアウトリーチによる家族支援における面接場面と、社会資源としての認知症家族会のミーティング場面の2点に着目し、ナラティブ・アプローチによる支援の可能性を検討した。ソーシャルワークの技法としてナラティブ・アプローチを位置づけることで、地域社会における総合的かつ包括的な実践モデルとなることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The primary outcome of the study is to have shown that narrative approach is effective to support for alzheimer's and dementia caregivers. There is a possibility that narrative approach as social work will be a general approach in communities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,100,000	660,000	3,760,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーク、ナラティブ・アプローチ、認知症、家族

1. 研究開始当初の背景

(1) 認知症ケアへの注目

超高齢社会の到来を目前に控えた今日、後期高齢者数の増加という人口学的推計が注目されている。介護問題との関連でいえば、後期高齢者数の増加は、要介護リスクの高度化、重度化を意味する。近年特に注目されているのは、身体的介護だけでなく、精神的介護として「認知症ケア」である。認知症高齢者の数は、2015年には250万人、2025年には300万人を超えることが予測され、高齢者

介護問題の大きな部分を認知症問題が占めることになる。このような時代的背景のなかで、認知症ケアへの注目は急速に高まり、社会福祉学（ソーシャルワーク、ケアワーク）領域においても、無視することのできない重要な研究テーマとなっている。

(2) 家族支援の必要性

これまで家族内問題であった介護問題は、介護保険制度の施行・改正のなかで社会化・外部化されつつあるわけだが、このことは介

護における家族の介護責任からの完全な解放を意味しない。介護保険制度の導入による「措置から契約へ」というパラダイムの転換は、介護家族による高齢者の処遇をめぐる新たな自己決定を迫る結果となった。このことは近年の「施設から在宅へ」という介護実践の場をめぐる政策動向とも重なり、介護家族に、これまでとは別の形での役割や責任を求めている。この議論の延長には、家族介護における虐待の問題があり、ソーシャルワーク的関心からいえば、虐待する家族への介入だけではなく、虐待の予防・防止としての「介護家族への支援」がクローズアップされる。このことは、2006年4月より施行された「高齢者の虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律（高齢者虐待防止法）」の趣旨とも符合する。

(3) 家族支援におけるナラティブ・アプローチ

「介護家族への支援」という研究テーマに関する先行研究の蓄積は十分ではない。特に認知症ケア領域においては、認知症介護家族がかかえる困難経験の内実が明らかになっていない。認知症ケアは、身体介護とは別の、また計量分析による客観的な記述が限界を示す、「特有の困難」があるといえよう。

本研究代表者は、認知症介護家族がかかえる困難の内実を「エピソード・ナラティブ」(Flick 1995=2001)としてその構造と移行プロセスを明らかにしつつある(荒井 2006)。この物語としての困難経験にもとづいた支援のありかたは、「ストレス」という抽象的な言葉に換言されてしまいがちな、それぞれの介護者の個別性(固有の物語)に着目した援助を可能にする。

このような認知症介護家族がかかえる「特有の困難」への支援は、従来のアプローチでは対応困難であり、新しいアプローチが要請される。具体的には、「社会構成主義」や「ストレングス」、そして本研究で着目する「ナラティブ・アプローチ」といったポスト構造主義対人援助の潮流をあげることができる。この潮流の中でも「社会構成主義」と「ストレングス」に関しては、社会福祉学の領域においても紹介がなされ、一定の研究蓄積がある。

しかし、ナラティブ・アプローチに関しては、ソーシャルワークの隣接領域において、主として、欧米の理論動向の紹介にとどまっているのが現状である。特にソーシャルワークの文脈からの検討はほとんどなく、さらにいえば、わが国のソーシャルワーク実践の現場における実践的研究は、皆無に等しい。

本研究におけるポスト構造主義対人援助技法としてのナラティブ・アプローチへの着目は、従来から問題視されてきたソーシャル

ワークにおける「理論と実践の乖離」という困難克服の一つの方向性として位置づけることができる。このことは、近年のソーシャルワークの職域が拡大されるなかで求められる、「ソーシャルワークの専門性」の向上の議論とも合致する。

(4) セルフヘルプ・グループとの関係

本研究代表者は、これまで認知症介護家族支援に着目し、平成15年～平成17年度文部科学省科学研究費補助金(研究代表者)、平成16年～平成17年日本興亜福祉財団ジェロントロジー研究助成金(研究代表者)を受託し、ナラティブ・アプローチを自然な形で実践している具体的場面として認知症介護家族によるセルフヘルプ・グループ(=認知症家族会)を対象として研究を行ってきた。

そこでの研究成果からいえることは、セルフヘルプ・グループの援助的効果は、参加者の同質性という説明とは別の説明が可能であるということである。すなわち、ナラティブ・アプローチにおいて重要視される「自由な語り」を引き出す際には、司会者、世話人が重要な役割を果たす。この司会者、世話人の果たす役割は、他の同質の参加者による困難な経験の語りを促進させる「ナラティブ・コミュニティ」(Rappaport 1993)を醸成するうえで寄与する。

近年のソーシャルワークの専門性の向上が求められている中、このようなセルフヘルプ・グループが示唆する従来の「専門性」とは別様の「新しい専門性」の可能性は、ソーシャルワークの観点からナラティブ・アプローチを検討するうえでの資源となる。

〔文献〕

荒井浩道(2006)「認知症介護家族がかかえる困難への支援—ナラティブを中心に」日本興亜福祉財団『ジェロントロジー研究報告』7, 75-80.

Flick, U., (1995), *Qualitative Forschung* by Uwe Flick, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH. (=小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子訳, 2002, 『質的研究入門: <人間の科学>のための方法論』, 春秋社.)

Rappaport, J, (1993), *Narratives Studies, Personal Stories, and Identity Transformation in the Mutual Help Context*, *Journal of Applied Behavioral Science*, Vol. 29 No. 2, pp. 239-256.

2. 研究の目的

(1) 目的と射程

本研究は、これまでの本研究代表者によるセルフヘルプ・グループ研究から着想を得て、

ソーシャルワーク専門職によるナラティブ・アプローチの可能性と限界を検証することを目的とした。具体的内容と射程は、以下の4点である。

- ① 高齢者介護のなかでも特に認知症介護に着目し、認知症介護家族が抱える特有の困難経験の内実を明らかにすることで、虐待の防止・予防の観点から支援のあり方を検討する。
- ② ポスト構造主義対人援助技法として注目されているナラティブ・アプローチに着目し、認知症介護家族がかかえる困難経験を支援する技法としての有効性を理論的に検証する。
- ③ 認知症介護家族への支援の現場として、地域包括支援センターにおける社会福祉士の実践（個別援助として）、認知症家族会（集団援助として）に着目し、そこでのナラティブ・アプローチの活用のされかたを実証的に明らかにする。
- ④ 認知症介護家族支援におけるナラティブ・アプローチを、ソーシャルワークの観点から実践理論としての体系化を図る。

(2) 特色、意義

本研究開始当初想定した学術的特色・獨創性、予測される結果と意義は、以下の4点である。

- ① 認知症介護家族がかかえる困難経験の内実を、当事者の主観に基づく物語であるエピソード・ナラティブとしてとらえる。
- ② ソーシャルワークにおける「理論と実践の乖離」克服の可能性を、ポスト構造主義的対人援助技法としてのナラティブ・アプローチに求める。
- ③ 理論的研究に留まっていたナラティブ・アプローチを、わが国の具体的な福祉援助の現場実践のなかに位置づける。
- ④ 従来のソーシャルワークの対抗的技法としてではなく、ジェネリック・ソーシャルワーク（総合的かつ包括的な相談援助）としてナラティブ・アプローチの体系化を図る。

3. 研究の方法

(1) 平成 19 年度

- ① 認知症ケア、家族介護、ソーシャルワーク、ナラティブ・アプローチ、社会構成主義、ストレングス、セルフヘルプ・グループ、質的調査法などに関する国内外の文献レビュー
- ② 地域包括支援センター社会福祉士（非常勤）という立場からのナラティブ・アプローチを用いたソーシャルワーク実践のデータ収集とデータ分析
- ③ セルフヘルプ・グループとしての認知

症家族会への継続的参与観察

(2) 平成 20 年度

- ① ソーシャルワーク、ナラティブ・アプローチ、拒否的・消極的利用者、ケアマネジメント、セルフヘルプ・グループ、質的調査法などに関する国内外の文献レビュー
- ② 地域包括支援センター社会福祉士（非常勤）という立場からのナラティブ・アプローチを用いたソーシャルワーク実践のデータ収集とデータ分析
- ③ セルフヘルプ・グループとしての認知症家族会への継続的参与観察

(3) 平成 21 年度

- ① ソーシャルワーク、ナラティブ・アプローチ、回復の語り、ピアサポート・グループ、質的調査法、テキストマイニングなどに関する国内外の文献レビュー
- ② 地域包括支援センター社会福祉士（非常勤）という立場からのナラティブ・アプローチを用いたソーシャルワーク実践のデータ収集とデータ分析
- ③ セルフヘルプ・グループとしての認知症家族会への継続的参与観察

(4) 平成 22 年度

- ① 認知症ケア、ナラティブ・アプローチ、解決志向アプローチ、セルフヘルプ・グループ、セルフヘルプ・グループ、地域包括ケアシステム、社会的孤立防止、自然言語処理、テキストマイニングなどに関する国内外の文献レビュー
- ② 地域包括支援センター社会福祉士（非常勤）という立場からのナラティブ・アプローチを用いたソーシャルワーク実践のデータ収集とデータ分析
- ③ セルフヘルプ・グループとしての認知症家族会への継続的参与観察

4. 研究成果

(1) 「回復」のポリティクス

経験は意味を欲求し、私たちは物語を語ることで経験を意味づける。脱近代的文脈における私的な経験は、既成の概念では説明し尽くせない複雑さを前提とする。

1990年代以降、家族療法や心理療法の領域を中心に、クライアントの「ナラティブ（語り・物語）」に注目したアプローチ（ナラティブ・アプローチ）が広がりを見せている。最近ではソーシャルワーク領域における応用事例も散見されるようになった。ナラティブ・アプローチは、バイステイック的な専門職の倫理としての「傾聴」や「非審判的態度」を含みながらも、近代主義的な技法の限界を

克服する脱近代のアプローチとして定着しつつある。

ナラティブ・アプローチには、クライアントやその家族によって一般的に期待される「回復」が、支援目標として設定し難いという特徴がある。ナラティブ・アプローチでは、医学的な治療のように何が「回復」であって、何が「回復」でないのかを明確に定義することはできない。またこのアプローチを必要とするクライアントの多くは、「回復」の見込みが薄いか、殆どないという過酷さを有している。

もちろん、クライアントによって「回復」への期待が語られることもある。だがその期待自体が、クライアントが拘泥する困難である可能性が高い。そもそもクライアントが語る「回復」への期待は、クライアントの自然な欲求であるというよりも、周囲に人々の期待を読み込んだものであり、社会的、文化的に構築されたものといえる。この意味における「回復」とは、クライアントが内在化するドミナントストーリーであり、また私たちの社会に埋め込まれたメタナラティブであり、さらにいえば私たちの経験の意味付けに支配的な影響を及ぼすマスターナラティブである。

ところで、専門職が実際にナラティブ・アプローチを用いた支援を行う際、この「回復」が支援目標として密輸入されてしまう危険がある。クライアントが「回復」を求めて来訪するケースでは、支援目標として「回復」を位置づけざるを得ないこともある。また専門職が、組織や機関に属しながら支援を行う場合、「回復」という成果が制度的に要求されることもある。

このような「回復」を巡るポリティクスは、近年ナラティブ・アプローチの導入が進みつつあるソーシャルワークの領域においてさらに特殊なものとなる。ソーシャルワークにおける「回復」は、「こころの回復」に限定されず、「社会的な回復」を視野に入れる。それはたとえば、「住み慣れた地域での自立生活」というものであり、今日のソーシャルワークにおける支援目標として一般的に設定される。だが、このことを達成するには、クライアントのこころの変化というミクロな要件だけでなく、人間関係や社会的、文化的制度を変化させるというよりマクロな要件を伴う。

※荒井(2010)の一部を加筆修正した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 荒井浩道 (2010) 「ナラティブ・ソーシャルワークにおける『回復』のポリティクス—認知症介護家族への支援を中心に」 駒澤

大学文学部社会科学『駒澤社会学研究』42, 13-30. 査読なし

(http://www.lib.komazawa-u.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/U_CHARSET=utf-8/XC00720195/Body/link/rsk039-01.pdf)

- ② 荒井浩道 (2011) 「認知症ケアに求められる家族支援の視点」 中央法規出版『おはよう21』22(4), 28-29.

〔学会発表〕(計7件)

- ① 荒井浩道 (2010) 「当事者に寄り添う専門性—ソーシャルワークとしての認知症介護家族支援を手がかりに(シンポジウムⅢ—認知症ケア専門士の地域での役割と今後の課題)」 日本認知症ケア学会『日本認知症ケア学会誌—第11回日本認知症ケア学会プログラム・要旨集』9(2), 195. (2010年10月24日, 神戸国際展示場)
- ② 荒井浩道 (2010) 「わが国のソーシャルワーク実践におけるナラティブ・アプローチの可能性—認知症介護家族への支援を中心に」 日本家族研究・家族療法学会『家族療法研究(第27回日本家族研究・家族療法学会大会抄録集)』27(1), 47. (2010年6月4日, ビッグパレットふくしま)
- ③ 荒井浩道 (2009) 「ナラティブ・アプローチにおける『書き換え』の技法—『ナラティブ・ソーシャルワーク』の可能性」 日本社会福祉学会『日本社会福祉学会第57回全国大会報告要旨集』, 258-259. (法政大学多摩キャンパス, 2009年10月11日)
- ④ 荒井浩道 (2008) 「拒否的／消極的利用者への支援—ソーシャルワークにおけるナラティブ・アプローチによる介入」 日本生命倫理学会『日本生命倫理学会第20回年次大会プログラム・予稿集』, 97. (2008年11月30日, 九州大学医学部百年講堂)
- ⑤ 荒井浩道 (2007) 「ナラティブ・アプローチのソーシャルワークにおける／としての固有性」 日本社会福祉学会『第55回日本社会福祉学会大会報告要旨集』, 128. (2007年9月27日, 大阪市立大学杉本キャンパス)
- ⑥ 荒井浩道 (2007) 「ソーシャルワークの専門性とナラティブ・アプローチ」 日本社会福祉実践理論学会『第24回日本社会福祉実践理論学会大会プログラム』, 72. (2007年6月24日, 大妻女子大学)
- ⑦ 荒井浩道 (2007) 「地域包括支援センターにおけるナラティブ・アプローチを用いたソーシャルワークの実践」 日本社会福祉士学会『第15回日本社会福祉士学会大会プログラム』, 80-81. (2007年6月2日, 伊勢志摩ロイヤルホテル)

[図書] (計4件)

- ①荒井浩道(2010)「大衆長寿時代の家族の行方」濱口晴彦編『大衆長寿社会を生きる知恵(シリーズ1)』日本高齢者生活協働組合連合会, 37-48.
- ②荒井浩道(2010)「利用者・家族・そして支援者の介護」濱口晴彦編『大衆長寿社会を生きる知恵(シリーズ2)』日本高齢者生活協働組合連合会, 31-48.
- ③荒井浩道(2009)「自立と共生一年齢を超えて」濱口晴彦編『自立と共生の社会学—それでも生きる理由』学文社, 58-79.
- ④荒井浩道(2008)「繋がっていかない利用者への支援—ソーシャルワークにおけるナラティブ・アプローチの可能性」崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ編『〈支援〉の社会学—現場に向き合う思考』青弓社, 114-137.

[その他]

駒澤大学図書館駒大電子紀要検索

<http://www.lib.komazawa-u.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒井 浩道 (HIROMICHI ARAI)

駒澤大学・文学部・准教授

研究者番号：60350435